

(有)アグリゴールド矢木の
矢木龍一代表



優良「受賞」産地を訪れて

労働力も機械も皆で共有 地域全体で発展する

(有)アグリゴールド矢木は、富山県を代表するメガファームです。水稻・大豆を中心に150ha以上の農地を管理。ハウス白ねぎやミニトマト、いちごなどの施設園芸作物を導入し、通年雇用に成功しています。“地域全体の発展”を経営方針の中核に据え、地域農業とともに歩む経営を紹介します。

地域ぐるみで省力化・低コスト化を実現

アグリゴールド矢木は、入善町の農業をけん引する、地域にとって大きな存在です。令和元年度の作付面積は、水稻97ha、大豆55haであり、そのうち100haを超える農地を受託し、大規模経営を展開しています。広大な農地を管理していながら、水稻の労働時間は10.6時間/10a（富山県の平均は25.0時間/10a）と効率的に運営しています。また、施設・機械費も12,000円/10a（同平均40,000円/10a）と、県平均を大きく下回っています。そのうえ、水稻の1等比率はほぼ100%で、平成29年産の収量は約590kg/10a（同平均540kg/10a）と高品質・高収量です。なぜ、これほどの大規模経営で省力化・低コスト化を実現できているのでしょうか。

アグリゴールド矢木の大規模経営の秘訣はズバリ“地

域連携”。地域の担い手5法人与協力し、受託農地を交換・集積しています。面積の大きさなどの条件に関係なく農地管理を分担しているため、農地が分散することなく効率的な管理ができています。「人も機械も地域で共有します。そのほうが自分たちですべて抱え込むより、ずっと効率的です」と、代表取締役の矢木龍一さん。農地を集積したことにより、農機の所有台数も必要最低限に抑えられています。150haの農地に対して、田植機は1台、6条コンバインは2台しか使用していません。綿密に計画を立て、例えば、田植えの場合、1日約4haずつ作業を実施すれば、約1ヵ月ですべての圃場の対応が十分可能です。機械のメンテナンスをきっちりと行うことで使用台数を抑えているのです。

人手が必要な作業は、地域の共同組織を積極的に利用することで解消しています。水稻の苗は地元の飯野上部育苗組合から購入し、病虫害防除は町域の認定農業者で構成される「ハイテク入善」に委託しています。また、矢木さんご本人も、息子であり同社取締役の隆之さんとともに無人ヘリの免許を取得し、オペレーターとして病虫害防除組織に参加しています。このように、アグリゴールド矢木では、地域農家との関係を密にし、地域全体で作業の分散化に取り組んでいます。

令和元年作付け体系

品目	品種	面積	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
水稻	コシヒカリ	50ha					○	△			■	■		
	ミルキーQueen	12.3ha					○	△			■			
	てんこもり	34.7ha					○	△			■			
大豆	エンレイ、シュウレイ	55ha						○	○			■	■	■
白ねぎ		60a	■	■	■		○		△					■
ミニトマト		9a			△				■	■	■	■	■	■
いちご	よつばし、紅ほっぺ	8a	■	■	■	■	■	■	■		△			■
ブルーベリー		3a							■	■	■	■	■	■

○：播種 △：定植 ■：収穫



ハウス30 a、露地30 aで栽培された雪のように美しい白ねぎ



白ねぎの調製作業は水稻班の男性7人が担当

やりがいと責任を持たせて従業員の意識向上

アグリゴールド矢木では、水稻・大豆に加え、ハウス白ねぎ・ミニトマト・いちごなど施設園芸作物を積極的に導入し、通年で従業員を雇用しています。担当は、水稻班（水稻・大豆・白ねぎ・機械整備）と園芸班（ミニトマト・いちご・ブルーベリー）に分かれます。従業員12人のうち4人が女性で、きめ細やかな作業が必要な園芸班で活躍しています。

また、同社は、従業員が働く環境に、やりがいと責任が発生するような仕組みをつくっています。従業員一人一人に担当品目・圃場を任せ、各人の収量を計上。平均値以上を獲得した従業員にはボーナスに反映しています。この取り組みを始めてから、収量がアップしただけでなく、従業員の責任感の醸成やスキルアップにつながりました。

同社は、平成30年に富山県内の農業法人で初となる、ミニトマトといちごの栽培でグローバルGAP（農業生産工程管理）認証を取得しました。「リスク管理のために、あえてハードルの高いグローバルGAPを取得しました。食品の安全はもちろんのこと、従業員の業務上の安全を確保するために取り組んでいます。令和2年1月には3回目の認定状が届きました。GAPを取得したことで、従業員の作業はより丁寧さを増し意識が向上されました」と矢木代表は語ります。

全農が開発したトロ箱養液栽培システム「ういずOne」をミニトマトに導入



日照時間が不足傾向の富山県でも安定生産できる「よつぼし」ツブツブ食感が子どもたちに大好評



失敗があるからこそ、うまくいく

アグリゴールド矢木が根を下ろしているのは水稻中心の地域です。そのようななか、同社は栽培収穫期間が重ならない園芸品目を取り入れ地域農業をリード、なかでもいちごを栽培するのは同社のみです。いちごは平成29年に導入しましたが、最初の年は病害に悩まされた1年となりました。その失敗を受け平成30年は大成功をおさめ、今では町と協力し保育所の園児にいちごの観光農園を開放するなど、地域を大切にする取り組みを進めています。

「失敗を恐れてはいけません。失敗があるからこそ、2年目がうまくいきます」と矢木代表。現在はハウスを2棟所有していますが、令和2年度はさらに1棟追加する予定です。

地域で潤う、一人勝ちはしない

現在、いちごの栽培では競争相手がいないため、この環境は同社にとって有利なのでは…と思いきや、矢木代表にそのような考えはありません。

「『他の農家がいちごをつくれれば競争になってしまう』とは一切思いません。地域でもっといちごを生産する農家が増えてほしい。成功事例・失敗事例はいくらでも共有する準備ができています。一人勝ちではなく、地域みんな

で潤いたい。けん引することができる部分はけん引し、地域の仲間と一緒に産地を盛り上げていきたいです」と抱負を語ります。

同社が持つ栽培技術や情報などを地域全体で共有し、地域全体が発展することを願っています。

【全農 耕種総合対策部 アグリ情報室】